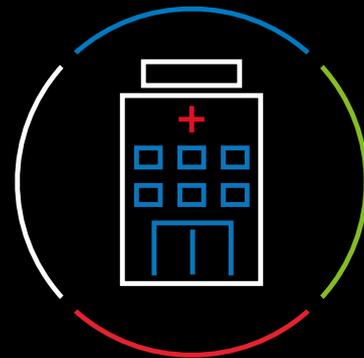
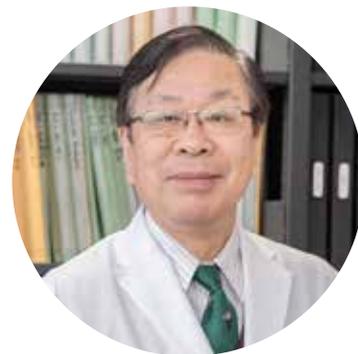


# 「常に成長し、世界一を目指す病院」 兵庫県立はりま姫路総合医療センター UpToDate導入事例



兵庫県内の二次医療圏域の一つである播磨姫路医療圏は、姫路市に人口、医療資源ともに一点集中しており、周辺地域の医療が必ずしも十分ではありませんでした。そこで、かつての兵庫県立姫路循環器病センターと製鉄記念広畑病院を統合・移転し、2022年に設立されたのが、兵庫県立はりま姫路総合医療センター（愛称：はり姫）です。

今回、播磨姫路医療圏における地域医療の中心的役割を果たす、はり姫の取り組みと、臨床意思決定支援リソースUpToDate®の活用について、木下芳一院長ならびに関係者のみなさまにお話を伺いました。



兵庫県立はりま姫路総合医療センター 院長  
木下芳一

## はり姫が担う地域の医療

播磨姫路医療圏は人口およそ82万人、そのうち姫路市の人口はおよそ53万人。姫路市内には複数の基幹病院があり、西播磨や中播磨、兵庫県北部からも多くの患者さんが姫路市内へ流入します。その方々に十分な医療を提供するためには二つの課題があるといいます。救急医療が比較的弱い地域であることと、地域全体での医師数が十分ではないことです。こうした背景の中、はり姫は開設され、「地域の医師とともに診療する」を最初のミッションとして掲げてきました。

木下芳一院長は、開院当時を次のように振り返ります。

「職員と地域住民のみなさまへは『かかりつけの主治医と私たち専門医集団で対応します』とアナウンスするとともに『患者さんそれぞれに最良の医療を提供します』というメッセージを発信しました。」

また、はり姫は、地域医療の中心的存在として、地域の医療機関との関係構築にも注力しています。同じ医療圏内の宍粟市にある公立宍粟総合病院は、はり姫とともに地域の医療を支えています。宍粟市は過疎化により高齢化率が高い地域で、救急医療や専門医療を必要として、救急車で1時間近くの道のりになりますが、はり姫に患者さんが紹介されることがあります。



公立穴栗総合病院  
内科医師  
水谷直也

## 救急医療と高度専門医療

はり姫は、救急医療と高度専門医療も担っています。かつては重症度の高い救急医療や難易度の高い専門医療を必要とする患者さんは、神戸など他地域まで行く必要がありました。しかし、はり姫が開院して以降は、はり姫が播磨姫路医療圏における救急医療の司令塔となりました。播磨姫路医療圏内で唯一の救命救急センターを有し二次・三次救急に対応、ハイブリッド手術室等の高度専門医療を十分に提供できる医療設備も備えており、地域医療機関からの患者紹介にも積極的です。

公立穴栗総合病院内科の水谷直也医師は、患者紹介の際の情報共有の質に留意しているといいます。「消化器内科の診療を中心とする当院から、はり姫の各診療科に患者さんをご紹介する際には、遠方からの紹介が不利益になってしまうことは避けるべき、と心掛けています。何も知らないまま紹介するのは患者さんにも各診療科の医師にも憚られることです。紹介したい患者さんの疾患に関する背景疑問については予めUpToDateで検索し、知っておくべき解決策などを一旦整理してから、診療情報提供書を準備するように努めています。」

一方、はり姫の糖尿病・内分泌内科 竹内健人医師は、紹介を受ける側としても、一定の標準化されたベースラインが担保されていることは重要だと考えています。「標準化された医療が無い中で紹介状をいただくのではなく、ご紹介元では何が難しいのか、こちらに対してどのような治療を求めているのか、UpToDateの情報を基準として双方の考え方が共有できることで、その後の診療も変わってくるのではないのでしょうか。」

はり姫の内部でも、専門医とのディスカッション等で利用されています。たとえば、総合内科医は目の前にいる患者さんに対し、幅広い領域の知識を求められる状況にあります。一方で、自らの知識を最新の情報でアップデートしていくのは限界があります。目の前の患者さんの状況に応じ、想定される病態や疾患に関する状況をできるだけ短時間で確認し、自分自身の知識とすることが必要となるのです。

総合内科医である八幡晋輔医師は、院内の専門医とのディスカッションにもUpToDateを利用します。「海外の情報が多いため、日本ではどうかという観点や、患者さんの状況に合わせて情報をカスタマイズする必要はあります。しかし、ベースラインとなる情報を持たなければ各専門医との深いディスカッションはできません。自分自身の学びを深めるとともに、実際の治療方針決定のために専門医と同じ情報を共有できるという点でも、非常に有用です。」



兵庫県立はりま姫路総合医療センター  
糖尿病・内分泌内科医師  
竹内健人

## 人材育成と臨床研究

医師の人材育成においても、はり姫はさらに一步上を目指します。良い指導医を招致して基幹型の臨床研修プログラムを組んで専門研修を提供するといった取り組みは多くの医師育成機関で行われていますが、近隣の大学との協働で行う臨床研究も、レベルの高い専門医のやりがいを満たすクリエイティブな取り組みの一つです。

現在の医療では「ガイドラインに則っても治せない患者さん」が一定数いらっしゃいます。こうしたケースを無くすために、より良い医療とは何かを突き詰めて検討できる、他の研究者や専門家の方々が提供する医療の情報を収集し新しい医療を行えるような環境整備が必要です。

もちろん倫理的な配慮や、患者さんやご家族との十分なコミュニケーション、周辺からのサポートも必要ですが、新しい医療を行う上で重要なのは「情報へのアクセスだ」と木下院長はいます。今この患者さんを治す方法がパブリッシュされた医療で足りないのであれば医師が自ら臨床研究を行う、今まで治せなかった患者さんを治すことができる方向性を見出し、必要ならば薬剤の開発にも関与する。その手段の一つが、病院全体で利用できる情報リソースの導入でした。

木下芳一院長は次のように述べています。

「専門医は自身の専門領域については世界標準の領域を超えている専門医は多いですが、そこから離れると必ずしも世界標準に達しているとはいえません。私は、『専門外でも基本的な診療を行いながら、専門領域では他の人には負けない医師』を育成したい。当院では、一つのことだけ突出するのではなく、富士山の裾野のように幅広い知識を持ち、中心には非常に高い専門性を持っている医師を求めますので、あらゆる方面で標準的な知識を得ていることがスタートラインになります。治せない患者さんを無くすという課題に真摯に向き合っていくためにも、研修医から専門医まで、信頼のおけるエビデンスに基づいた世界基準の情報を幅広く活用してもらいたいです。」

こうした方針を受け、臨床研修センターの副センター長を兼任する八幡晋輔医師は、研修医への教育やディスカッションの際、研修医が最初に触れる情報として、二次資料の積極的な活用と、「疑問点をまずは自分で解決してみることの大切さ」を説いているといいます。

そして、「当院は研修教育施設ですので、研修医の先生にも『調べる癖』をつけていただきたいです。そういう医師が増えてくれば、ほかの医療機関にもその風土は広がります。実際、UpToDateには信用できる文献も載っていますし、そこからさらにキーワードを絞ってほかの文献にたどり着けます。こうした『自ら調べて学ぶ姿勢』が、医師としての自己研鑽や学びの深さに繋がってくるのではないのでしょうか。」と、竹内健人医師も同意します。

このような先輩医師の考えは臨床研修プログラムの現場ではどのように伝わっているのでしょうか。多くの診療科を有し、さまざまな疾患についての学びを得られるのではという理由から、はり姫を研修先に選択したという初期臨床研修医の山本淳生医師は、次のような利用方法があるといいます。「研修医が集まって症例検討を行う時や、受け持った患者さんの治療方針を検討する時、UpToDateを利用しています。総合内科で外来を担当した際には、電子カルテを見ながら不明点を検索し、時には指導医の先生と一緒に検索することもありました。エビデンスに則った情報が集約されているため、自身の知識の再確認や、知らないことを新しく学ぶツールにもなっています。」



兵庫県立はりま姫路総合医療センター  
総合内科診療科長兼  
臨床研修センター副センター長  
八幡晋輔



兵庫県立はりま姫路総合医療センター  
初期臨床研修医  
山本淳生



## これからのはり姫

はり姫は、開院当時より多くのミッションを掲げ、着実に成長を続けています。そんな中、喫緊の課題の一つとなるのが「医師の働き方改革」です。

「自身の働き方改革という点でUpToDateをみると、やはりいつでもどこでも気になった時にすぐに検索できるのは大きなメリットです。疑問点が解決していないまま患者さんの前に出るよりも、気になった時にどこでも検索し、疑問点を解決した上で患者さんに対峙する方が、職場でのストレスは軽減するのではないのでしょうか。」（八幡晋輔医師）

「情報のレベルが保証されているのもメリットです。情報化社会である現在、一定レベルが保証されていない情報も氾濫しています。その中で情報を取捨選択するのが自分なのか、予めツールがしてくれるのか。後者の方が医師のストレスも軽減されますし、患者さんにとってもメリットになると思います。」（竹内健人医師）

最後に、木下芳一院長はこのようなビジョンを述べてインタビューを締めくくりました。

「当院が目指すのは『世界一の病院』です。それは、病院経営の重点を、維持ではなく成長と捉えているからです。姫路市民の一番の自慢は『姫路城』に譲りますが、『はり姫』は二番目の自慢と言ってもらえるよう、兵庫県一、関西一、西日本一、日本一と、いずれは世界一の病院を目指していきます。

そしてこれは人材育成にも言えることです。若い人たちが付いていきたいと思う指導者は、自身も成長と発展を続ける人です。今、圧倒的な実力があっても、現状維持を目指す人は必ず後進に抜かれます。逆に実力がさらに伸びて「追いつけない」と思わせる人には、必ず人が付いてくるのです。そのために必要なのは常に学び続ける姿勢であり、今後もUpToDateがその一端を担ってくれればと期待しています。」

## 兵庫県立はりま姫路総合医療センターについて

兵庫県の西側に位置する兵庫県立はりま姫路総合医療センターは、計35の診療科（内科系12、外科系8、ほか15）を標榜する、播磨姫路医療圏内最大の病院です。その一方で、高度専門医療や人材育成・臨床研究といった役割も担っており、「常に成長する病院」を目指しています。2022年の開院当初から、医師だけではなく、医療スタッフ全員がUpToDateを利用できる環境が病院全体で整備されています。

\* 所属、役職等は、取材当時の情報です（2023年12月）